

平井尚志の なめとこ山通信



第69回 持っていることと、持たざること

皆さん、こんにちは。なんだかお久しぶりになります。すみません。いかがお過ごしでしょうか。連載を2回お休みした間に、私事ではありますが、こちらはわりと色々なことがありました。大きなこととしては、同じ市内ですが引っ越しをしました。それから、娘の受験があったり、私も学校で卒業生を出し、4月からは新しい勤務先に異動となりました。初めての工業高校勤務です。ちょうどこの時期は、体育祭の準備（会報が出る頃にはもう、終わっていると思いますが）で、てんやわんやしているところです。

ところでこの「なめとこ山通信」は、このままフェードアウトしてしまおうかなと思うこともありました。すみません。でも、色々考えて、こんなことを思いましたというだけの内容を、本当につれづれなるままに、また書いてみようかなと思っています。お時間ありましたら、お付き合いください。

これまで私は、数回の引っ越しを経験してきました。その度に周辺を整理し、身軽になって新生活を始めているはず、でした。しかし実際は、不必要とも思われる私物が、年を経るにつれどんどん身の周りに増えていくのです。ただ、今回の引っ越しに関しては、なるべく運ぶ物を整理し、断捨離を決行してみたのです。妻に言わせれば、私の部屋にはまだまだいらぬ物が山積みになっているのですが、特に本に関しては、断腸の思いで多くを手放してしまいました。それらは、学生時代に古本屋で買った全集物や、どうでもいい雑誌や、読もうと思ってつつい本棚の肥やしになっていた本など、色々です。手放すのにあたり、一応吟味して選別し、これほと思う本だけは本棚に残しました。引っ越しも済んでだいぶ経ち、本棚を見ていて、あれっあの本がない、と思うこともあったりします。そうではありますが、なるべく、物を増やさないようにと心がけたい、とは思っているのです。

ところで3月に、大江健三郎さんが亡くなったというニュースがありましたね。大江さん追悼の意味も込めて、本棚に残した大江さんの本を、再読しようと思いました。『「自分の木」の下で』という本は、大江さんが若い人に向けて書いたもので、学校の授業でも度々使わせてもらった作品です。こちらは読みやすいので、お薦めです。芥川賞を獲ったのは「飼育」だったけど、ずいぶん久しぶりに『死者の奢り・飼育』も再読しました。しかしこれは、お薦めしません。暗いです。芥川賞ってどういう基準？とか、思ってしまいました。それで今度は、本棚にある、芥川賞受賞作を拾って読んでいきました。『螢川・泥の川』『妊娠カレンダー』『海峡の光』……。芥川賞も色々ありますが、池澤夏樹の『スティル・ライフ』は、懐かしい気持ちで再読しました。昔好きだった女の子が、作品中の

「チェレンコフ光」のくだりを暗唱していたことを思い出したのです。川上未映子の『乳と卵』は最近、登場人物の物語が付け足されて『夏物語』という大長編になりました。そちらもたいへん面白く、お薦め本です。もしかしたら、川上未映子の方が村上春樹よりも先に、ノーベル文学賞を獲るかなあとか、いや、それはないか、とか楽しく想像しました。（アメリカで評判が良いそうです。）村上春樹は先日、新しい長編小説『街とその不確かな壁』を出しましたね。評判は様々ですが、初期の長編『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』に似た感じといわれています。それで、今はその『世界の・・・』を再読しています。夢中になって読んでいた頃を思い出しています。



そしてやっぱり、新しい小説も、気になる！ 読みたいです。たぶんきっと、買ってしまおうだろうなと思っています。……はっ！ どうしよう。……今、部屋の本棚は大量の本を処分したおかげで、空きはあるのです。とりあえずそこが埋まるまでは、新しく手に入れてもよしとするか、と、甘々な考えに揺れているところです。（図書館で借りるのも、いつまで待てばいいんだ！という感じなのです。）

昔は、読みたい本に囲まれてのんびり田舎暮らしの老後を過ごしたい、とか夢見ていましたが、今は家族の圧力にも押されて、持っているものは少しずつ処分して、逝くときは何も持たず、みたいな暮らしが良いのかなあと、少しずつそんな思いにシフトしているところなのであります。手元に残した本も、いずれは少しずつ手放して行って、イヴォン・シュイナードの言うように、最後は何も持たないで、知恵だけを持って生活できたら、なんて、夢のようなことを考えたりするのです。

先日、「TAR ター」という映画を観てきました。ベルリン・フィルで初の女性常任指揮者となった、という設定の、リディア・ターの物語でした。フィクションですから、ターのスーパーウーマンぶりはもの凄く、すべての物を手に入れ、音楽界の頂点の地位を築いています。しかしその、傲慢さや強引さのためであったでしょうか、順風満帆な生活に綻びが生じ始め、最後は正にすべてを失って落ちるところまで行き着く、というような怒濤の人生が描かれていました。少しサイコサスペンス的な要素があって不気味だったり、謎が謎のままで解決されないじゃんという評があったり、作品の評価はまちまちですが、面白かったです。ターを演じたケイト・ブランシェットの、鬼気迫る怪演？を観るだけでも価値はあります。（アカデミー賞にノミネートはされましたが、主演女優賞は獲れませんでした。残念。）こんなふうには、地位も名誉もすべてなくしてしまって、自分は生活できるかなあとか、あれれ、なくすような地位も名誉も持ってないじゃんと思ったりしました。そして、リディア・ターという女性の生き方に触れて、以前観た「ノマドランド」という映画を思い出したりもしていました。

「ノマドランド」の主人公は、ファーンという女性です。彼女は、物語の冒頭で、失業し、家を失い、キャンピングカーでの車上生活を始めることになります。ターはすべてを持っている人、ファーンは持っていない人、という始まりです。そして、ファーンは最後まで、そのままでした。物語的には大きな事件もなく、それゆえにジワジワと来る映画となりました。ファーンを演じた、フランシス・マグドーマンドの演技も素晴らしく、演技と言うか、ドキュメンタリー的な要素も映画にはあったので、マグドーマンドが本当に、車上生活を続けるノマドのように見えました。孤独ではあるのですが、その最小限の物しか持たない生活の方が、幸せであるのかもしれないと思いましたし、孤独を見つめることにも、意義があるかなとも思いました。ターとファーンは、両極端に見えるのですが、実は共通しているところもあるように思えてきました。生きる強さ、逞しさ、と言いますか、自分で選んだ生き方を生きる姿、と言いますか。寝ているときの夢で発火するターと、水の流れの中にたゆたうファーンと。比べて観るのも、面白いかもしれません。



5月19日から21日の三日間、G7広島サミットが開催されました。被爆地広島でのサミットということや、ウクライナのゼレンスキー大統領が電撃来日をしてサミットに参加したことなど、話題性はあり評価する人もいる一方で、岸田総理が核軍縮に焦点を当てて発表したとされる広島ビジョンについては、失望したという声があるのも事実のようです。「自国の核兵器は肯定し、対立する国の核兵器を非難するばかりの発信を被爆地からするのは許せない」と批判したのは、被爆者のサーロー節子さんでした。日本は核兵器を持たない国ですが、そのことで結局は、持っている国の核の傘の中に入らなくてはならず、広島ビジョンでは核兵器禁止条約のことに触れることも出来ませんでした。広島ビジョンにははっきりと、「我々の安全保障政策は、核兵器は、それが存在する限りにおいて、防衛目的のために役割を果たし、侵略を抑止し、並びに戦争及び威圧を防止すべきとの理解に基づいている。」とあります。これは、核抑止政策を正当化する宣言で、そのことに不安や懸念、怒りや悲しみを覚えた人がいるのです。もちろん、G7各国が「核兵器のない世界の実現」を目標とし、核兵器不拡散条約や核実験禁止条約の重要性を謳うのですが、それらつまり、私たちはもう持ってるけれどあなたは持たないでね、ということなのです。じゃあ、いったいどうすればいいって言うの？ 誰が何を発信すれば良かったのでしょうか。……核抑止力があるから、平和が維持できているというのは、皮肉なことですがある意味では事実と言わざるを得ないのかもしれないかもしれません。そのことに賛成する人もいれば、反対する人もいます。それでいいと思います。色々な意見があっ

て、偏らずに耳を傾けて、自分の思いを確かにしていきたいって、そう思います。いちばん怖いのは、関心をなくすことです。耳を塞いで知らないでいることは、罪なのです。広島サミットで私たちの総理大臣が何を発信したか、被爆者の方達はどう感じたか、そうしたことをまるで知らずにいてはいけないと、思っています。

最後は、持っていることと持たざること、とは少々ズレた話題になってしまったかもしれませんが。でも思うに、持っている立場と持っていない立場とをきっぱり二分する必要はそもそもないのかもしれませんが。持っていることは持たないことであり、持たざることはすなわち持っていることでもあるのです。と、禅問答のような結論を導いて、煙に巻いたところで、また次回、お会いしましょう。失礼します。